

安部隆一は会社員。

そこそこの月収でそこそこの出世コースに乗っている。

安部には日向成美という彼女が居た。付き合って2ヶ月。

特に重い付き合いをしていたわけではないが、お互い気持ちはあった。

周囲から見ても普通のカップルだった。

ある日突然、成美は部屋でクビを吊って死んだ。

隆一にはまったく思い当たる節がない。

隆一は訳が分からなくなり、放心状態に。

本田泰史はフリーター。高校卒業してから一度もまともな職に就いていない。

泰史は金はないが女にはもてる。大体働かなくても食っていける状態になっている。なので金は無くても暮らしぶりはかなりリッチである。

そんな通常とは違う生活を続けた結果。泰史の金銭感覚は狂った。

お金がない時でも普通に借金をして大きな買い物をするようになった。

借金はいつか五百万を超え、取り立て屋に追われるようになった。

当時、成美は福島風の風俗店で働いていて、同じ店で働く泰史と付き合っていた。

成美の収入はかなりのものだったが、さすがに五百万は払えなかった。

成美の働いていたお店はヤクザが経営している。お金はかなりある。

そのヤクザはかなり間抜けでスキだらけ。その気になれば店ごと盗んでもバレなそんな勢いだった。

泰史は金を盗んで借金を返し、余った金でもとに生きよう、と成美に話を持ちかけた。

緻密な計画のもと、成美と泰史は店の通帳と印鑑を盗み、東京へ逃げた。

通帳には二千万ほど入っていて、借金返済には充分だった。

印鑑を泰史、成美が通帳を持ち、なるべくそのお金には手をつけないようにし、二人はうまく追っ手から隠れた。

泰史は東京で別の彼女が出来、成美とは疎遠になっていた。

成美も、綺麗な生活がしたくなり、泰史とは距離を置いた。

その逃亡から半年して成美と隆一は出会った。

成美は派遣社員として隆一の会社の事務をやるようになっていたのだ。

泰史はある日、今の彼女と歩いているところを襲われた。

スモーク張った車が突っ込んで来たのだ。

泰史は上手く逃げたが彼女は重体。全身骨折に意識不明である。

泰史にははっきりと犯人がわかっていた。

泰史はお金を返せば殺されはしない、と思う。

そして成美の元に行くが、彼女は死んでいた。

成美の死から一週間。葬儀も全部すんだ成美の部屋。

隆一は会社をさぼり成美の部屋に来ていた。

家具の下に通帳を見つめる。それを成美の家族に届けようと思った。
そこに通帳を探しに来た泰史が来る。

泰史が入って来たとき隆一は泣いていたので、ヤクザとは思わなかった。

隆一 「……………あ、すみません」

泰史 「あ、あの。……………どちら様？」

隆一 「……………日向さんの、友人です」

泰史 「……………あそう。俺、親戚」

隆一 「……………」

泰史 「……………葬式には行けなかったんだけどよ」

隆一 「……すみません、勝手にあがっちゃって。まだ、信じられなくて」
泰史 「……俺、詳しく聞いてないけど、成美、どっしたんだよ？」
隆一 「え？」
泰史 「どっやって、死んだんだ？」
隆一 「……」

隆一、深刻な顔でクビを釣った、というゼスチャー。
□で説明する気力がない。

泰史 「クビを？」
隆一 「……(うなずく)。」
泰史 「犯人は捕まったのか？」
隆一 「え？」
泰史 「成美をやったやつだよ！」
隆一 「……」
泰史 「……あ？」
隆一 「……自殺、なんですよ」
泰史 「……」
隆一 「信じられないでしょうけど、……僕だって……(信じられません)」
泰史 「……(自殺に見せかけることが出来るほどのプロの存在に恐怖)」
隆一 「あの(立つ)」
泰史 「警戒して) なんだよ？」
隆一 「……もう少し、この部屋にいいですか？」
泰史 「……」
隆一 「ちょっと仕事する気になれなくて」
泰史 「……あ、ああいいよ。俺ちよつとここで探し物があるんだけどな」
隆一 「探しもの？」
泰史 「……ああ」
隆一 「なんですか？」
泰史 「なんだっていいだろ」
隆一 「あ、俺、この部屋のことなら大体把握してるんで」
泰史 「……」

隆一 「……付き合ってたんです。成美と」
泰史 「……通帳探してんだ。ちよつと成美に預かってもらってた通帳があつてよ」
隆一 「通帳」
泰史 「ああ」
隆一 「これですか？」
隆一、通帳をかざす。
泰史 「あー！」
泰史、ひつたくろうとする
隆一 「ちよつとー！」
隆一、それをかわす。
泰史 「ほか！それは俺んだー！」
隆一 「や、ちよつと待って下さいよ」
泰史 「いいからよこせー！」
隆一 「これ成美の両親に届けるんですから」
泰史 「俺のなんだよー！」
隆一 「……証拠は？」
泰史 「ねーよんなもん」
隆一 「……」
泰史 「疑うなー！」
隆一 「……」
泰史 「それ（通帳）の印鑑だつて俺が持つてんだからー！」
隆一 「……（通帳の名義の）なんの店ですか？」
泰史 「……前、俺と成美が働いてた店だよ」
隆一 「……」
泰史 「福島県いわき市、ピンク天国、だろ？」
隆一 「……成美が、そこで？」

ここから

泰史 「細かいことはいいじゃねえか」
隆一 「……」
泰史 「な？」
隆一 「……どういう店、なんですか？ピンク……天国？」
泰史 「ピンサロだよピンサロ」
隆一 「……」
泰史 「ああ、なんだ、その、そういう店で働いてたからどこのとかって、そういうのは後にしてくんねえかな、ちょっと今それどころじゃねえからな」
隆一 「……」
泰史 「彼氏だったんならそんな過去気にすんな！どうせ死んじゃったんだからよー！」
隆一 「なんすか、その言い方？」
泰史 「あ？」
隆一 「……ひよっとして」
泰史 「……あんだよ？」
隆一 「あんたが成美を自殺に追い込んだんじゃないのか」
泰史 「何言ってるんだちげーよ」
隆一 「成美はなあ、うちの会社で真面目に事務やってたよ」
泰史 「あいな」
隆一 「土日にもちよこつとデートして、月曜になったらまた会社で。誰にも迷惑なんかかけてない」
泰史 「……」
隆一 「なのに、あんたは過去のそんなことネタにして、成美を脅してたのか！」
泰史 「(必死に) 勝手に話を膨らますな！」
隆一 「(通帳を持って) これが、成美の過去だか知らないけど、あんたには絶対渡さない！」
隆一、出て行くこととする。

泰史 「バカ！待て！」
隆一 「……」
泰史 「おめーすげー勘違いしてるぞー！」

隆一 「なにがだよ」

泰史 「色々だよ」

隆一 「……」

泰史 「そんなもん、あいつの親に預けたら、あいつの親まで死んじゃまっぞ」

隆一 「……はあ？」

泰史 「なんも知らねえ幸せな彼氏気取ってていいけどよ、これから生きていく俺の人生まで奪わねえでくれよ」

隆一 「……泣き落としですか」

泰史 「それを俺に渡せ！」

隆一 「だめです。この店行って本当に成美が働いてたのか、聞いてみますよ」

泰史 「……バカか？死ぬぞ？」

隆一 「死ぬとか！簡単に口にするなよ！！」

泰史 「死ぬぞ死ぬぞ死ぬぞ死ぬぞ」

隆一、泰史の胸ぐらをつかむ

隆一 「……」

泰史 「あいつは、殺されたんだよ」

ひんがし